六月総評

立花開

絵の中でしか重なれない静物　　合川秋穂　東京都

この作品の「重な」るとは、芯まで触れ合って重なるということ。“相聞”には様々な意味が含まれる。対象が人でも動物でも物でも、焦がれ求める感情が相聞ではないか、と思っている。平面世界だからこそ許される、この世の法則を越えた触れあい。しかし平面世界でしか許されない触れあい。

ファスナーはしめないでいる
海をみる　　村上　すう　京都府

広さを感じる。ファスナーを開いて浴びる潮風は背中の汗を冷やすだろう。開く、という命の無防備さと自由さ。ファスナーを、眼を、心を開いて海を感じる。「いる・みる」という柔らかく閉じ切らない韻律が読み手の心も海の果てまで望むような上向きにさせる。

罵詈雑言のようにきらきら
しゃぼん玉　　山本先生　東京都

「きらきら」した「罵詈雑言」はより心に刺さりそうな気がする。言葉に重さや粘度があれば身構えることもできるけれど、ふわふわきらきらと飛んできたものが自分にとって毒かどうかなんてすぐ判別できるのだろうか。「罵詈雑言」も「しゃぼん玉」も浴びたら汚れてしまうというのに。

虫篝(かがり)
クレーの忌にもてんし焼く　　田崎森太　東京都

下句「にも」が皮肉で恐ろしい。主体はいつも「てんし」を焼いていて、「クレーの忌」も例外ではない。「天使シリーズ」はクレーが晩年に皮膚硬化症を患いながら描いたもの。その天使さえ「虫篝」にて焼いている。主体の感情が虫篝の炎の向こうの闇に溶けて見えない。

虹消えて眼の中にある水分　　吉沢　美香　　宮城県

見えなくなったからといって“ない”訳ではない。見えなくなっても「眼の中にある水分」に虹から反射した光は含まれ続ける。体の中の水は、どうしても生命を維持するために必要な塩分や脂をセットにしてしまうが、この「水分」は純度の高い水を思わせる。私たちも虹を映す水分を持つ自然の一部。

せんせい、かぎかっこ
閉じたくないです
あとから痛むの知ってるんでしょ　　こはくいろ　　大阪府

大人のずるさは、過剰に傷つかないようにするためのもの。今立てなくなったら次が滞る。次が滞ったら、その次も。だから目をそらしてしまう。閉じてもそのままでも痛みは避けられないのに。「かぎかっこ」は想いへの蓋のメタファーだろうか。対象が明言されていない故に読者の想像が膨らむ。

街歩き
食べれないわたしは
座れないわたしだ　　加藤　万結子　　愛知県

消化器系の手術をしたと思われる作者。何度も「食べられない」ことの作品の投稿を読んできたが、経験からしか抽出されない純度を感じるようになってきた。食事は多く喜びと喩えられてきた。「座れない」という動作を与えたことで作者の孤独感が読者の胸に鮮明に刺さる。大勢の人がいる街でたった一人、食も休息も共有できず身も心も立ち尽くす。ら抜き言葉がやや気になる。

小雨降る展望台に登る
ほらあすこら辺が象の見る夢　　手塚桃伊　　東京都

夢を通じて、顕世に染みのようにぽつりぽつりと繋がる常世。「象の見る夢」の場所とはどんなところだろうか。限定された時と場所でのみ主体に見える、夢との繋ぎ目。しゃべり言葉で描かれた「あすこら辺」に、指をさしているが伺える。信じて言い切れば、“本当”は現れる。

未開封りんご酢奥で光る梅雨　　字坊　人造　宮城県

「奥」とはどこの奥だろうか。戸棚の、記憶の、心の、どこかの奥の薄暗い空間に「りんご酢」があり、梅雨の気配に呼応してその液体を揺らし光らせている。叙情と描写共に完成度の高い一句であると感じた。今後も注目していきたい作者。

風に揺られ続けた
風に揺られ続けた

葉音は
怖い　　杉本　太　　北海道

どんなものであっても、強制的に揺さぶられ続けていると腹が立ってくる。自分の意志ではないからだ。風に揺られることが存在理由のひとつになっているかのような「葉」の重なりに、暗がりがいっそう深く染みこむよう。望まない運命に揺られ、弄られる。